作者紹介

早乙女勝元（さおとめ・かつもと）

■東京足立区に生まれる。下町の中小企業労働者として，はたらきながら小説を書きはじめ，1958年から作家生活にはいる。

■作品は「下町の故郷」「ハモニカ工場」「ゆびきり」「小麦色の仲間たち」「青春の歯車」「太陽がほしい！」以上理論社，「下町の恋人たち」「愛と口笛とぼく」「胸さわぎ」以上東邦出版社，「美しい橋」文理書院，「火の瞳」講談社，「ぼくの愛のノート」あゆみ出版社，「輝坊といっしょ」新日本出版社「東京大空襲」岩波新書など。

■現住所は，東京都葛飾区高砂8—15—20

秘　密　　¥　580

昭和47年5月30日　発行

著　者　早乙女勝元

発行者　藤山真人

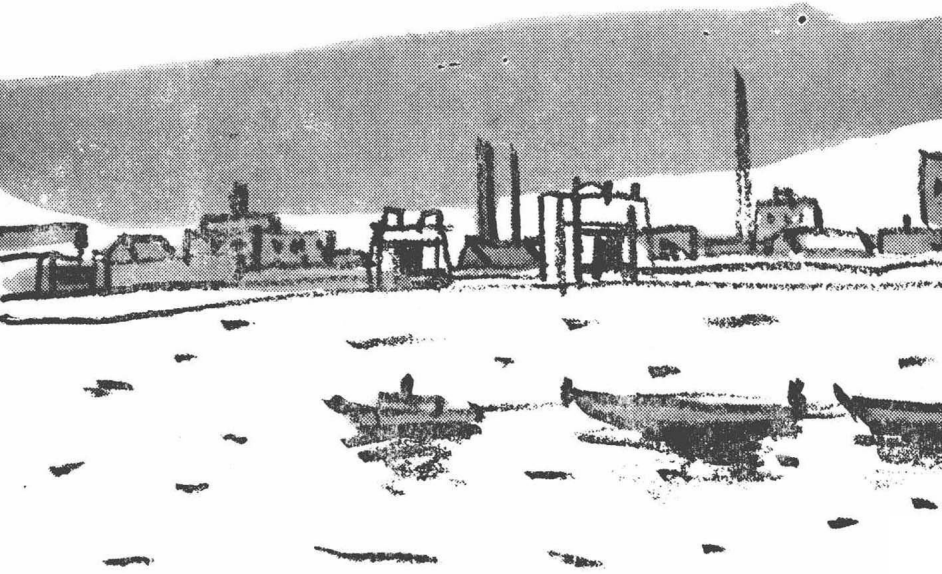
発行所　東京都千代田区神保町2～28
TEL（261）5725～7番
振替／東京85275番
（株）東邦出版社

落丁・乱丁はおとりかえいたします　太平印刷社・大和工業

秘

密

第1章



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

一九五八年七月の、ある炎天の日の午後であった。

アスファルトの道はとろけ、一台のトラックがはしりすぎると、バリバリとぶきみな音をたてて、大蛇のうろこにたタイヤのあとが、白い道の上におどった。

道には、車道も歩道もくぎりがなかった。陽かげをぬって、前かがみに歩いてゆく人々の背後から、つっかかるような勢いでトラックがすりぬけてゆくと、排気ガスの青白いけむりが、むっとあたりにひろがった。人々はそれで顔をしかめているのか。それとも、うちつづく不景気の渦のなかで、もはや、顔をあげて歩く気力さえなくしてしまったのか。

そういえば、道の両がわにたちならぶ、さびれた商店の陳列ガラスは、どれもホコリにまみれて、にぶくくすんでみえた。太陽の熱は、そこにも垂直におちてきて、指をふれれば、ジリッとやけつくようである。はてしもない炎天の町——今にもプスプスと燃えあがるかとおもわれる町は、どこもかしこも、視界のとどくかぎり、黄金色にまぶしく輝き、白い熱気があふれて、ゆらゆらかげろうのようにまいのぼる。

アスファルトの道を、一人の男が帽子もかぶらずに、ポクポク歩いてくる。じみなポロシャツは汗にまみれて、背中にまといつき、顔ぜんたい水をあびたように、ビッショリとぬれて光っている。まだ若い。年は、二十か、二十一か。まぶしそうに目をほそめ、唇をゆがめた顔は青白く、濃い髪の毛が、むぞうさにひたいにはりついていた。身体つきはややほそい感じであるが、どことなくがっしりした骨組と、ひどく長めの足が印象的であった。

彼が足をとめたのは、バスの停留所の前だった。陽かげにたたずんで、手の甲で汗をぬぐう。通りのむこうから、野球放送をつげるラジオのアナウンスが、ものうげにきこえてくる。時々、道路をすっとんでゆくトラックやオート三輪の音をのぞいては、真夏の町は、人々が死にたえたようにもの静かだった。

爪先をのびあがらせて、ロータリーの方をみたが、バスの影はみえなかった。私鉄電車をつかった方が早いかもしれない。彼はバスをあきらめ、歩道にそって大またに歩きだそうとした。そのとき、はっとその場にたちすくんだのだ。

通りに面して、すぐ目の前にちいさな郵便局がある。郵便局が彼をとらえたのか、彼が郵便局をとらえたのか、しばらくはじっとたちどまって考えていたが、ふいに、その目のおくがきらりと光って、彼は局のなかへ入っていった。客は誰もいなかった。

「現金書留の封筒、ありますか？」

意外にひくい声でいった。

ブラウスのえりもとをたくしあげて、ウチワで胸元に風をおくっていた郵便局の女は、上目づかいに彼の顔をみると、

「——何枚？」

「いえ、一枚でいいんです」

「では、三円いただきます」

と、これは、おそろしくものうい声だった。

彼は横はばのひろい厚手な感じの封筒を手にすると、窓ぎわの台のそばへ歩みよった。戸はすべて、くっきりとあけはなされていたが、空気は重々しくよどみ、風はすこしもなかった。どこかに遠くサイレンがきこえるが、あれは三時か。とすれば、急がねばならない。ありあわせの紙をみつけると、彼はすぐにペンをとって、胸のなかにひそんでいたことばを、つぎのようにしるした。

しあわせが、早くあなたのもとを訪れますように。

その一行でよかった。これ以上はなにもいうことはないとさえおもえる。みじかな文字のなかに、これまでの彼の思いは、すべて集約された感じだった。

彼はポケットから、おずおずと茶封筒をとりだした。ひらきっぱなしの封筒の口から、千円札のはしがざっくりとみえるが、実をいえば、これは彼の金ではない。つい今さっき、ねばりにねばって、三か所から集金してきた金である。公金は、しめて一万八千円ある。

どの札も、集金先の中小企業のあえぎをそのまま示すかのように、うすよごれてねばねばときたならしかった。彼はそこから、比較的新しい千円札をぬきとり、一枚二

枚とかぞえて、六枚をひきだした。これを、たった一行の手紙にくるんで、現金書留の封筒のなかにつきいれたときは、さすがに指の動きがこわばった。

――ええくそッ、とつぶやいた。目をつぶるような気持で、あらあらしく封をとじ、その上に二枚の印紙をはった。

ふたたびペンをとって、表に女の住所をしたため「三谷あさえ様」とかいた。指がふるえ、文字があやしく乱れたので、そくざに裏をかえして、ちいさく「高橋恵一(たかはしけいいち)」とかきこんだ。――これが彼の名前だ。年は二十一歳。山岸製本株式会社の臨時工である。

「おねがいします」

と、窓口にさしだすと、女はウチワをおいて、封筒のうらおもてをじろじろみつめていたが、

「……ああ、ハンコ、ないのね？」といった。

「ハンコ？」

恵一は、ドキリとした。

「ハンコ、いるんですか？」

「いるんですけど、なければいいわ……」

「はあ……」

「この四スミに、拇印(ぼいん)をおしてくださいね」

「四スミにですか？」

「このつぎは、忘れないでください。困りますから――」

このつぎと、女はいう。恵一は、わずかに唇をゆがめた。

つぎの機会があるとはおもえないのだった。むろんこの六千円の約束の金が、あさえの窮状(きゅうじょう)を一変させることなどおもいもよらない。それは、ほんのなぐさめにしかすぎぬであろう。しかしそれにしても、一日せいいっぱい働いて、たかだか三百円ほどしかとれぬ恵一にとって、六千円の金を右から左へ送ることは、けしてたやすいことではないのだ。二度と、できるとはおもえない。

いや、できるものなら、二度が三度といわず、ありったけを送ってやったにしても、それはそれでよいのだが……と、恵一は、朱肉のついた指先を紙でふきとりながら考えた。汗がひたいをすべって、ポトリと一つ、封筒の上におち、三谷あさえの谷の字をにじむようにぼやかした。作業場に手ぬぐいを忘れてきたことが、またしても気になった。

封筒を窓口にさしだすと、こんどは、なかにいくら入っているかと、女はぶしつけにたずねた。おもわず、ぐっとおしつまった。
「金額ですわ」
と女は事務的にくりかえして、恵一の顔をみた。
「六、六千円ですが……」
「では、六十円いただきます」
現金書留を送るばあいには、なかみの額までいわなければならないのか。それが公金であることを見すかされたように、恵一はうろたえた。すると女は、目で笑った。大丈夫ですわ、つかないはずはありませんからと、そのほそい目が語っている。彼がうろたえたのを、女はそのように誤解してうけとったものらしい。
しかし考えてみれば、つこうがつくまいが、それは他人の金であって、この女とはなんの関係もありはしないのだ。だから、涼しい顔をしてられるのだ。ところが、おれときたら……と、恵一はいらだたしげにそうおもいたくなったのを、やっとのことこらえて郵便局を出た。女の背中ごしの電気時計の長針が、つっとうごいて、三時十二分を示したことに気づいたからだ。

ふつうよりも少しでもおそいとみれば、社長の宗平は、すぐに集金先に電話をいれて、恵一の行動をたしかめるだろう。宗平のことだ。ついでに集金の額までできかないともかぎらない。そうなれば一大事である。
恵一はあえぎながら、駅への道のりを飛ぶように歩いた。左右にまがりくねるせせこましいマーケットの道をすこしゆくと、つきあたりが私鉄の駅だった。
頭上のガードの上に、地鳴りにもにた音が、にぶくきこえはじめたのは上り電車のやってきたしるしだ。彼はあわてて改札口にとびこみ、キップをにぎりしめて、一段とばしに階段をかけのぼった。ホームにとまっていた電車の、半分しまりかけたドアをぐっとこじあけて、なかへすべりこんだ。
さすがに息が苦しい。ドアにもたれかかって、しばらくはゆっくりと胸の息をはきだしながら、ああ、たすかったとおもった。
電車のなかはガラすきだった。ラッシュには窓ガラスまでひびが入る殺人電車も、ひるまはからっぽで、みるからにきたならしいのだ。ひとまずあいている席へ、身体をなげだしてすわると、おもわずしらず、ふといため

息が胸をつきあげてくる。それは、電車にまにあったということよりも、あさえとの約束をついにはたしたという、一種の虚脱感にもにた、かすかなやすらぎなのである。

これでいい、これでいいのだ。あの金は、たぶん明日中に彼女のもとにつくだろう。一日でも早くつけば、それだけあさえはたすかるのだ。なにも、郵便など利用せずとも、直接に金をもってゆけばよかったのであるが、恵一はもう二度と、あさえに会いたくなかった。

ふたたびあさえに会うということで、いっそうふかい悲しみがこみあげてくるような気がする。いや、そんなことよりもなによりも、彼女を見るにたえられないのだった。

だが、その一方に、金の後始末という問題がある。これも考えねばならない。集金の一部を私的に流用したことが、もしも宗平に知られるなら、たちどころに首がとぶ。したがって、明日かあさっての短時間のうちに、どこからか六千円の金をかりてきて、集金の穴をうずめねばならない。そんなきわどい芸当ができるか。できる。恵一には一つのもくろみがあった。それ故、このようなだいたんなことができたといえるのである。

まず、あちこちにたのみこむ。それでも借りられない最悪の場合には、給料の前がりをすればいいのだ。さいわいに給料日には、まだ半月に近いゆとりがあるから、そのあいだに前がりの分はどうにかうずめられよう。なんとかなろうさ。あしたはあしたの風がふくというではないか。

ゴトゴトと、あえぐような音をたてて、電車はゆっくりと、下町の屋根の上をはしっていた。色とりどりの貝がらをぶちまけたような無数の屋根の上に、太陽が狂ったように燃えている。電車が大きくカーブすると、焦げくさい強烈な日射しが、ジリッと背中にやきついてきた。

風はほとんどなく、手でいくらぬぐっても、ひっきりなしに顔から汗がふきでてくる。髪の毛はねちねちとしめり、手の平は、水びたしに汗がしみた。汗をふきとるものがなく、ついにその手を、二度三度と腰かけのビロードの上になすりつけた。ビロードはいちめんにはげて、やわらかなケバをなくしており、べっとりとした感触がきみわるく手のひらにのこった。

とつぜん冷たい風のひとかたまりが、窓の外からとび

こんできて、電車が下り勾配にさしかかったことを示した。上気した頬がひんやりと風にふれて汗がぬぐいさられると、これは生きかえったような気持だった。髪の毛が、さわさわとひたいにゆれて、恵一はおもわず目をほそめ、そしてとじたのである。

すると、くらい瞼のうらに、なにかほの白くうかびあがるものがある。その輪郭がしだいにあざやかにうきでてきて、目のうらいっぱいにひろがると、それはおさげ髪の少女の顔である。

……すきとおるような白い肌。いつもうるみがちの黒いひとみ。鼻からあごにかけて、きざんだように正しいかたち。その唇がほころび、やがてはれぼれと白い歯なみがきらめく。

……あさえだ、あさえだ。あさえの微笑だ。そして季節は、すべてがにおいこぼれるような春だ。

中学校のうらのSの字にまがりくねった道には、ニリン草がつつましくも白い花々をうきたたせ、歩いてゆくあさえの未来を祝福するかのようだった。恵一のすぐ前を、あさえの紺の制服の背中がゆれてゆく。彼は息をはずませて、そのあとをつけてゆく。今日はなんとしても、あさえに声をかけたい、いや、かけずにはいられないのだ。——

犬小屋のあるあすこの家のカド、あすこまでいったら、おもいきって彼女に声をかけようとおもう。ドキドキと胸がはずむ。すぐ前を歩いている少女に気づかれるのではないかとおもうほど鼓動が高まる。しかし、犬小屋のある家のカドまできたら、ふいに子供と犬がとびだしてきて、これでいっぺんにきせいをそがれてしまった。

では、そのむこうの電柱——あすこまでいったら、どんなことがあろうとかならず声をかけるのだとおもう。しかし目じるしの電柱の横まできても、唇がかすかにふるえただけで、声はことばにはならなかった。そして、あさえはふりむきもせずにいってしまった。

また夕方になると、恵一はいつも、あさえの家の前の路地を、いったりきたりしたものである。

その家の二階の物干にはときどき白い洗濯物が、ひらひらと風になびいていた。それらの洗濯物がみなあさえのものであるかのようにおもえて、恵一は胸をときめかせて、路地をはしりぬけた。そうしているうちに、ある

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いはひょっと、あさえが買物かごでもさげて、でてきはせぬかとおもって。

じっさいその機会は、一、二度あった。が、そのたびごとに彼はたちまち横丁にかくれてしまったから、「機会」は、目の前を通りすぎていってしまった。……と、このように書いてくると、彼と少女とは、まるきし知らぬなかのようであるが、あさえはかつて、恵一とおなじ中学にかよっていた。だから声をかければ彼のこともおぼえていてくれただろうし、親切に話をしてくれたかもしれない。そしてそんなところから、ごくさりげなく、二人は友達になれたかもしれないのである。

しかし、そのあさえが中学で全校一の秀才できらめいていたとき、恵一は、貧しさにすべてをうちひしがれた年下の劣等生であった。あさえが中学をおえて高校へすすんだとき、彼はちいさな町工場で、汗と油にどろどろになってケトバシをふんでいる一職工にすぎなかった。そして、あさえは一目みただけでも、身も心も洗われるかとおもえるほど美しく、透明な感じの少女であった。なにかの本でよんだ「愛の妖精」ということばは、まるであさえのためにあるかのように、彼は長いこと、おもいつめていたものである。

恵一は、あさえの面影をいつも心に秘めてはいたが、じっさいのあさえは、彼からはるかに遠い世界の人におもえてならなかった。はたしてあさえは、そのとき、彼の存在に気づいていただろうか。もしも彼女の心のなかになにもなかったとすれば、このくらい、むなしい話はない。

恵一はある夜、一案を考えて家をでた。毎日、朝と夕と、かならずあさえが通ってゆくその道のはしの一本のふとい電柱の幹を小刀でけずりとり、白くうきでた新しい木の肌に、クレオンであざやかに少女の名前をかきこんだ。その下に、これはずっとちいさく「K・T」と、自分のイニシアルをかいた。このささやかなしるしが、毎日二回、電柱の前を通ってゆくあさえの目にふれ、そのことによって、彼女が自分のことに、思いをとめてくれはせぬかと願ったのである。

青いクレオンの文字は、電柱の幹にいつまでも残って、四季がすぎるころいつしか淡黄色にかわり、二年めには灰色に変色し、そして三年めには、あとかたもなくきえてしまった。やがてまもなく道はひろげられ、電柱はと

りはずされ、今では、そんな思い出もあったのだろうかという、かすかな、とりとめのない記憶のひとひらにしかすぎなくなってしまった。

三年たって、恵一は十八になった。

で、あさえは、十九になったはずである。彼女は高校をでるとすぐ、どこかちいさな出版社につとめたということを風のたよりにきいた。

……

恵一は、そこではっと顔をあげた。電車がゴトリと、一つ大きくゆれてとまったのである。

人々のざわめきがきこえ、ドアがひらいたとみるまに、肩に魚のかごをしょった汗まみれの男たちの集団が、荒荒しく車内にふみこんできた。かごのすきまから魚の汁がたらたらと床の上にながれだし、なまぐさい人いきれが、むっと鼻をついた。男たちは不遠慮に車内いっぱいにひびくような声で、きわどい話をしては、ゲタゲタとうすぎたなく笑った。

恵一は心よい夢を中断されたように、いらだたしく目をとじた。しかしもう、あさえの思い出は二度とふたたび瞼のうらにうかびあがることはなかった。

彼がこれまで実に六年もの長い時間にわたって、じっと胸のうちに守り育ててきた少女への思いは、とつぜんゆうべ、そのあさえがふいにあらわれたことによって、ガラガラとくずれはじめ、今は、——その残骸のほか、なにも残ってはいないのである。焼跡のようなむなしさが、心のなかいっぱいに、はてしもなくひろがっている。

ただ一つの夢を失ったことによって、恵一ははじめて、自分の心にしめていたあさえの位置の大きさ、その比重のおもさに気づいたといえるのだ。

2

山岸宗平は、うすぐらい畳じきの事務室のなかで、一人で帳簿をいじっていたが、にわかに顔をあげると、

「それが、どしたい？」

と、こちらをふりむきざまにいった。彼の巨体をのせている古めかしい回転椅子（かいてんいす）が、にぶい音をたててきしんだ。

恵一をじろりと見かえした宗平の顔は、あさぐろい上にひふのキメがあらく、頬も首すじも極端にむくみあが

っていて、顔全体がギトギトと汗ばんで光っていた。それほど大柄というのではなかったが、身体中がっしりとこりかたまり、うすいランニングシャツを通して、濃い胸毛があらわにみえた。

恵一はポケットから、集金の金と明細とをとりだして、宗平の事務机の上におきながら、目をふせてさらにことばをつづけた。

「……それが、太陽堂だけ、三、四日待ってくれっていうんです」

「なにィ？」と、急に宗平の目が光った。

「それで君は、ヘエソウデスカで、ひきさがってきたのか？」

「い、いえ、ずいぶんねばったんです」

手の平でにじみでるひたいの汗をぬぐいながら、恵一はどもりがちにいった。

「でも、三、四日だけ待ってくれ、そ、そのかわり二十日頃には、かならず工面するからって、泣きつかれちゃいまして……」

「頃とはなんだい、頃とは？」

「いえ、二十日には、確実に」

「ふム、あすこはいくら残ってたんだい？」

「――六千円です」

「それを、二十日まで待ってくれっていうんだな？」

「そうです」

「じゃ、あさってじゃないか」

恵一は大いにうろたえ、その唇がかすかにひきつった。宗平からいわれるまでもなく、今日は十八日。で、二十日はあさってのことだった。こんなささいなことにどうして気がつかなかったのかと、あせったとき、宗平の目がなめるように彼の顔の上をうごいた。恵一ははっと息をのんだ。ひょっとすると、宗平は、なにもかも知りつくしているのではないかとおもったのだ。

すべてを知りつくした上で、彼の作為がどのようにうごいてくるかを、なにくわぬ顔でまちうけているのではないか。恵一のかえりのおそいのに不審をいだいた宗平が、太陽堂に電話をいれることはありうることである。すると電話の声は、お勘定をもっておかえりになられましたが、とこたえるだろう。こう考えると、恵一は両足のすくみあがるのを感じた。彼は上目づかいに、ちらりと宗平をみた。宗平はたちあがって、棚の上のタバコを

とりながら、
「あさっては、まちがいないだろうな、太陽堂さんも……」
と、ひとりごとのようにいう。
「ええ、もう一度、ぼくがいってきます」
「この夏がれのセチがらいときだから、たとえ六千円ったってばかにはできんよ。太陽堂もこのごろは、しぶくなりやがって、類は友をよぶ……か」
フンと鼻をならしてタバコをくわえ、火をつけた。チリチリともだえるように火が燃えると、ぱっと一息に灰色の煙をはきだしながら、宗平はなにかしきりと考えているようだった。恵一は、その煙のゆらゆらとたちのぼるところをみた。
そこにガクブチのようにちいさなガラス窓がはまりこんでいて、ガラス一枚をへだてて、階下の作業場が一目に見わたせる。
すさまじい紙ボコリの渦のなかで、ただ機械的に返本のページにヤスリの手をうごかしつづける男たちは、みな申しあわせたように上半身はだかで、なかには勇敢にも氷のかけらを頭にしばりつけた姿もある。あれは池田か。そのとなりでマスクをはずし、顔の汗をふいているのはだれか。ガラス窓のむこうが、湯気のようにかすんで、顔をおしつけてみないことには誰だかわからない。
ふつうの製本所なら、こんなにものすごいホコリはあがらない。かれらの仕事は返本再生業だ。つまり一度本屋の店頭にならんで売れずに戻ってきた本を、いちいちしらべ、手あかでよごれたページの部分をヤスリでみがき、表紙のいたみをなおし、カバァをかけなおして、もう一度新刊本として再生する。こういうわりの悪い仕事は、製本屋としての一人前の信用と設備をもたないところだけが手がけるきわめて変則的な仕事なのだ。
「とにかく、もう一度いってみてくれ」
宗平は タバコのすいがらを灰皿になすりつけていった。
「早いとこケリをつけないと、よけいしぶくなりやがる。……そうだ、君、二十日には、会社のかえりに寄ってもらうとするか？」
「かえりがけにですか？」
「無駄足しちゃばかをみるかんな」
「はい」

「こんだ、むこうでツベコベいうようだったら、がんとはねつけてくれたまえ、がんとだぜ。ええかね？」
　ええかねと、宗平はもう一度念をおした。恵一は、ひたいにおちてきた髪の毛をかきあげながら、ようやく息をついだ。宗平の声がたしかに、太陽堂にむいていたのをみてとったからである。もしも宗平がすでに恵一の秘事をにぎっていたとすれば、彼はきわめて執念ぶかく、まわたで首をしめつけるように、そのもっとも苦しいところにふみこんできただろう。宗平は、そういう男なのだ。
　ちょうどこのとき、あけはなされた扉の外に足音がきこえて、階段の一だん一だんにつまれた返本の山が、ユサユサと左右にゆれうごいた。二人が同時にそちらをふりかえると、上半身はだかで背の高い男が、ぬっと部屋の入口に姿をあらわした。
　ぞうきんのようなマスクをおもむろに顔からはずしながら、部屋のなかに入ってくると、勝手に扇風機のスイッチをひねり、その前にたちはだかった。すると、背中から肩から、紙ボコリがもうもうと部屋中にまいあがり、宗平の顔はたちまち渋くなった。
「なんだい？」
「ヤスリ、くださいよ」
　と、これはまたぶっきらぼうな池田五十七の声である。五十七というのは、山本五十六元帥よりもえらくなれという、切なる両親の願いがこめられているのだそうだ。
「何枚いるんだ」と、宗平がたずねた。
「十枚、もらっとくかな」
「なに十枚？　そんなにもか？」
「いちいち、とりにきたんじゃエネロスだがな。ヘッヘヘッヘとけやしませんよ。アイスクリームじゃないですから……」
　宗平はチョッと舌をならして、机のひきだしをあけ、紙ヤスリを一枚二枚と、かぞえてとりだしながら、おまえにはかなわないよと唇をゆがめた。すると池田は、赤い舌をだし、恵一と顔をみあわせて声をださずに笑った。笑うとこの男の白い歯は、ふしぎなほど清潔だった。彼ははじめて、身体のしんに残っていた不安と緊張とが、やわらかくときほぐされてゆくのを感じた。とにかく一つの危機はのりこえたといえる。が、問題はむしろこれからだった。

「ところで、古谷君のことだがな……」
宗平はヤスリを丸めてたばねながら、急にことばをかえた。
「やっこさんは、今朝おくれてきたな」
「いや、八時にはきましたよ」
池田がぼそっとこたえる。
「ふム、そうかね。わしは今朝、八時のサイレンの鳴っているときに便所にいったが、便所の窓からみれば、おっさん、あわてくさって走りおってくるじゃあないか。——それでも、八時かね？」
山岸製本では、臨時工が五分おくれると三十分、三十分おくれると一時間分の日給をさしひかれることになっていた。そして一回おくれると賃金をさしひかれるだけでなく、成績表にチェックがうたれ、それはやがて臨時契約うちきりの対象にされるのである。一部の職人をのぞいて、かれらはほとんどみな「臨時」の形式で働いていたから、明日から来なくていいといわれれば、それはそれっきりのものなのであった。
「古谷は、五分はおくれなかったですよ」
と、池田がさりげなくいった。
「ほんとかね？」
「ほんとうですよ」
「水掛論だな、これは。こうなるとやっぱり、タイムレコーダーも必要なんだなあ……」
「いいですか。八時のサイレンは十二秒鳴っているんです。八時十秒には、やつの足は一歩、門のなかへ入ってました。これだって、八時じゃないですか」
「まあ、いい！」
宗平はさすがに苦笑して、あらためて池田の顔をみた。それは、いいから、もう行って仕事につけということなのである。
池田は丸めた紙ヤスリを右手にもって、ポンと恵一の肩をたたき、二人はつれだって、事務室をでた。返本が天井（てんじょう）まで山積みにされた階段を、身体をハスカケにしておりてゆくと、
「あ、太陽堂たのんだぜ！」
宗平の声が、うしろから恵一の背中に追いすがってきた。階段をおりると、二人は急ぎ足になって、どちらかともなく水道の方にむかって歩いた。
たった一か所しかない水道の蛇口は、万年筆のサック

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com